

INVITATION

Ehime University Hospital [愛媛大学医学部附属病院広報誌]

VOL
13

2008

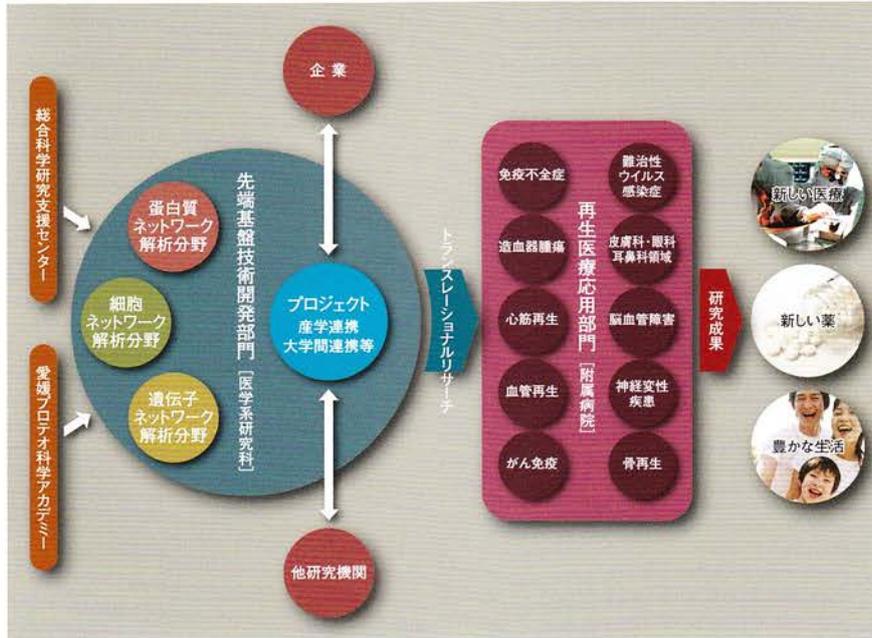


患者様から学び、患者様に還元する病院

愛媛大学医学部附属病院

夢の治療法を実現する再生医療研究センターに、 細胞プロセッシングセンター完成

再生医療研究センター センター長 安川正貴 医師



PROFILE

やすかわまさき◎大学院医学系研究科 医学専攻 生体統御内科学教授。1977年、秋田大学医学部 医学科卒業。医学博士。免疫血液学、感染免疫学、再生医学などを専門に活躍。趣味は山歩き、蝶の採集と飼育。蝶採集のため野山などのフィールドへ出かけることも。

世界的に注目を集め、研究や臨床成果の競争が激しい再生医療。その再生医療を中心に、難治性疾患の治療成績向上に貢献できる成果を、愛媛大学から世界に向けて発信できることを目指し、2007年に再生医療研究センターを設立しました。当院でも、上皮系組織や造血幹細胞などを用いた高度先進医療を推進してきました。例えば、培養表皮シート移植法を確立し、東海村臨界事故、小浜原発事故での治療に大きく貢献。眼科・耳鼻科領域では、羊膜を併用した培養角膜や鼓膜の移植法を開発し、臨床応用を開始。造血幹細胞を用いたがんや難治性ウイルス感染症に対する新たな治療戦略の開発にも力を入れています。このような各診療科や

研究室が単独で行っていた基礎研究をセンター化することで、横の繋がりを強くし、これまでの最先端の研究、治療をさらに推進し、レベルアップを図っていきます。再生医療研究センターは、基礎研究部門と臨床応用部門からなります。再生医療に限らず、広く生命科学や生物学の基礎研究を行っています。その成果を臨床部門へ還元し、臨床応用することで、患者様の治療成績の向上に結びつけます。

本学には神経系の専門家も多く、神経細胞の再生治療も目標の一つ。例えば、アルツハイマーや認知症、脊髄損傷による麻痺が残る患者様などに、神経細胞を移植する治療が可能になるなど、大きな可能性を持った夢のある分野です。この再生医療などに興味を持ち、勉強する若い医師や学生が増えてほしいですね。本学で研究や臨床応用をする人材が増えることで、医師不足の解消にも繋がると思います。

私自身、がんの免疫療法や免疫遺伝子治療の研究

が専門です。がんのペプチドワクチンの臨床試験では、従来の治療では治らなかった方が、元気で外来に通えるくらい回復されました。このような免疫療法など、患者様にやさしい治療が開発され、がんは不治の病ではなくなってきています。しかし、再生治療や細胞治療の研究には、細胞に人為的な操作を加えるために、特殊な設備が必要です。これまでの個別の設備や施設では限界があるため、今春、「細胞プロセッシングセンター（CPC）」を完成させました。これだけの設備、施設を備えている大学は、地方大学には珍しいでしょう。CPCは細胞治療全ての領域で活用でき、将来的には遺伝子治療にも使える設備も完備。現状に留まらず、今後はますます研究機器を充実させ、より一層、治療法の開発、実践を行っていきます。

当センターでは、大学病院という特性を生かして、基礎研究から得られた成果を、臨床へ。研究の全てを患者様の治療に、社会に還元することを目指しています。まさに「患者様から学び、患者様に還元する病院」という、当院のポリシーを象徴したセンターと言えるでしょう。



応用部門の要となるCPCの一室

自分の免疫機能を強化することで、肝炎や肝がんを治療する免疫療法

第3内科 阿部雅則 医師

ウイルスや細菌などの抗原が体内に入ってきたことを免疫細胞に伝える抗原提示細胞の一種、樹状細胞はリンパ球を活性化します。樹状細胞は数が少ないため、体から取り出し、一定の抗原に対する機能を添加して増やし、体内に戻すのがこの免疫療法です。がん治療には

使われていますが、私たちは世界ではじめて、感染症であるB型肝炎の治療に用いました。現在は治療の初期段階ですが、5人の患者様全員に免疫反応が起きていることが確認できています。センター化で、今後はよりグレードの高い免疫療法が可能になります。



骨髄の細胞で脳組織が再生する可能性。脳疾患の後遺症軽減に光

分子心血管生物・薬理学 茂木正樹 医師

血圧の研究をしていたこともあり、レニン・アンジオテンシン系という血圧をコントロールするホルモンに注目。このホルモンの調節機能は血圧上昇の他、骨髄にも影響していることを発見。そこで、脳梗塞をおこしたマウスに、骨髄にあるストローマ細胞を注射することで、

脳のダメージを少なくできないかと考えました。実験の結果、脳組織の障害をおさえることに成功。同時に使う薬剤で、より効果を高めることもわかりました。今後、臨床で使えるようになれば、脳疾患の後遺症などが軽減できると考えています。



自らの細胞から角膜をつくる研究を進め、角膜移植の発展を担う

眼科 白石 敦 医師

再生医療の進歩とともに、今までの角膜移植では治らなかった難治性の疾患に対して培養角膜上皮シート移植という治療法が開発され効果をあげています。他の施設では培養過程にマウスの細胞を使っているのですが、当院では全国に先駆け、皮膚科と共同で人の

細胞だけを使ったシートをつくることに成功しました。さらに臨床応用をはじめています。人の細胞と言えど、他人の細胞では拒絶反応を起こすこともありますので、今後は自分の細胞を使った培養上皮シートができるよう、研究を進めています。



自身の血液細胞を使った安全な血管新生治療で、下肢の動脈閉塞症を改善

心臓・血管外科 八杉 巧 医師

私は血管外科でバイパス手術が専門です。その中で下肢の動脈閉塞症における血管新生を高める治療も行っています。この療法は、患者様自身の血液から、血管新生を促す白血球の一種、単核球を抽出して、ふくらはぎの筋肉の中に注射することで、側副血行路を増や

すことが目的です。本人の単核球を使うため、他の療法よりも比較的安全ということも注目されています。治療はバイパス手術が不可能かつ、患者様の下肢切断を回避する場合があります。これまでに3名の方が治療を行い、改善がみられています。



愛媛大学医学部附属病院 センター・施設トピックス

お気軽にご相談ください

抗加齢皮膚科ドックを開始

当院抗加齢センターで行っている「抗加齢ドック」は、平成20年2月で2周年を迎え、多数の方にご利用いただいています。地域の皆様方への更なるサービス向上を目指し、平成20年4月22日から、お肌の老化防止や皮膚がんの早期発見、隠れた全身疾患を皮膚のサインから発見することを目的とした「抗加齢皮膚ドック」を開始しました。

加齢とともに蓄積される肌へのダメージを、最新の機械を用いてさまざまな角度から測定・評価し、その結果に基づき最適なスキンケアや改善すべき生活習慣などをご提案します。なお、この「抗加齢皮膚ドック」は、「抗加齢ドック」をご利用いただく方のオプション検査での提供となります。

◎問い合わせ先：

抗加齢センター

TEL：089-960-5932

FAX：089-960-5916

マドンナドクター活躍中!



この制度では、産後の体調や育児の段階にあわせて柔軟に勤務体制を組み、知識・技術を戻して生活リズムを作っていくことを支援しています。敷地内に院内保育所「あゝあゝキッズ」を整備し、より利用しやすいものにしていきます。また、医師として現場に復帰する上で、周囲の理解と協力が不可欠です。病院をあげてプロジェクトを支援し、先輩女性医師からアドバイスを受けることもできます。

本院では、出産・育児等で医療の現場を離れた女性医師の復帰を支援するため「マドンナ・ドクター養成プロジェクト」を実施しています。この制度を利用し、現在3名の女性医師が活躍しています。

マドンナ・ドクター 3名は、自分にあった勤務体制のもとで診療や研究に取り組み、育児と仕事の両立に日々奮闘中です。女性医師の新しい働き方を選んだ皆さんのこれからの活躍が期待されます。

総合臨床研修センター TEL：089-960-5098 FAX：089-960-5131 E-mail：kenshu@m.ehime-u.ac.jp

院内ボランティアへ感謝状を贈呈



平成20年6月4日(水) 愛大病院ボランティア感謝状贈呈式及び懇談会を開催しました。患者様主役の医療のためにはボランティアさんとのパートナーシップは不可欠です。愛大医療ボランティア「いきいき会」が平成16年の春に発足して4年、現在ボランティア数は50名を超え、活動内容は外来の送迎や病棟への誘導、図書サービス、花壇の整備など多岐にわたり、病院にとってなくてはならない存在です。

医療サービス室(医療福祉推進チーム)

TEL：089-960-5099

FAX：089-960-5134

「地域医療連携ネットワーク会議」立ち上げに向けて



平成20年6月17日(火)、県内全域21病院から約50名が参加し、地域医療連携ネットワーク会議設立準備のための幹事病院会議を開催しました。愛媛大学医学部関連病院長会議地域連携協議会において、検討されていたネットワーク充実に向けての取組がいよいよスタートします。医師会や行政の支援のもと、各病院の地域医療連携室及びそこに関わる人材の資質向上や施設間の連携推進、研究会の立ち上げ・運営など多様な活動を予定しています。

医療福祉支援センター

TEL：089-960-5322

FAX：089-960-5959

編集後記

今回特集した再生医学とは生命の持つ再生力を最大限生かせることによって、脳、心血管、眼、皮膚、肝臓などの臓器をよみがえらせる医学です。高度の先進的医療ですが、他に治療法の無い患者さんを救うことのできる究極の医療として進歩の著しい分野です。愛媛大学では再生医療センターを中心に数多くの医師が再生医療の開発と応用に参加しています。一方、どれほど医学が進んでも、病院に来る患者さんが安心して心地よくすごせるサポート作りも重要です。治らなかった病を治すことのできる「奇跡の病院」を目指して、愛媛大学医学部附属病院の挑戦は続いています。

◎愛媛大学医学部附属病院広報委員会
委員長 檜垣實男

◎表紙の人

白方裕司 准教授 再生医療研究センター

——培養皮膚の実験中——



愛媛大学医学部附属病院

〒791-0295 愛媛県東温市志津川 Tel.089-964-5111 (代)
ホームページ <http://www.hsp.ehime-u.ac.jp/>